



〈対談〉八女和紙を使う

——張子面、張子人形、団扇、錦絵——（二）

お話 宮松喜久三郎（人形・錦絵制作者）
聞き手・筆録・編集 大庭 卓也（久留米大学文学部教授）

今号は、福岡県うきは市で張子のお面や人形、団扇などを作っておられる宮松喜久三郎氏のお話を掲載する。

昨年の秋、うきは市の「お祭り横丁」という催事のチラシをたまたま目にし、そこで頒布されたという張子の狼面のことを知った。一見して古い日本美術をよく踏まえていることが思われたが、後日、人づてにこれには八女和紙が用いられていると聞いて、私はすっかりこの面に魅了されたのである。宮松氏はこの狼面の作者である。うつつらと雪が積もった令和七年二月五日、久留米大学御井学舎の一室でお話をうかがう機会を得たが、氏は年齢や経歴などを一切あかさなかった。芸術家にはよくある諧謔的な感情表現であ

「お祭り横丁」と八女和紙で作る張子面

大庭 本日はお寒いなか、ありがとうございます。宮松さんは古めかしいお名前ですが、何か謂われがあるのですか。

宮松 はい、幕末から明治にかけて活躍した熊本の生人形師の松本喜三郎（文政八年（一八二五）―明治二十四（一八九一））という方がおります。私の名付けの親が喜三郎の人形に感銘をうけたということで、そのお名前と私が生まれた朝倉の久喜宮とを組み替えて、宮松喜久三郎という名にしているんです。

大庭 なるほど。肥後の生人形は人間を本物そっくりに作って、当時は東京や大阪でも大評判だったらしいですね。どおりで、この狼面も真に迫っている（笑）。このお面はどういう経緯でお作りになったのですか。

宮松 これは、うきは市で催された「お祭り横丁」というお祭り（令和五年七月二十三日、道の駅うきは敷地内の野外円形劇場で開催）で作りました。僕の十代の頃からの友人に貞方威君という人がいて。彼は和楽器集団「切腹ピストルズ」（またの名を「江戸一番隊」とも。平成十一年十二月三十一日

の武蔵御嶽神社で演奏したこともあるようです）。

大庭 狼をかたどった狛犬がある神社ですね。そこで奉納演奏を。

宮松 はい。それで「お祭り横丁」では、張子の狼面を作ろうと。地域の人々で作り上げるお祭りなので、お面もうきはの人々と一緒に作り、材料も可能なかぎり地域のものを使いたいと思って八女和紙を使いました。ボランティアを募って、八名の方が協力して下さいました。出来たお面はお祭りで売りました。

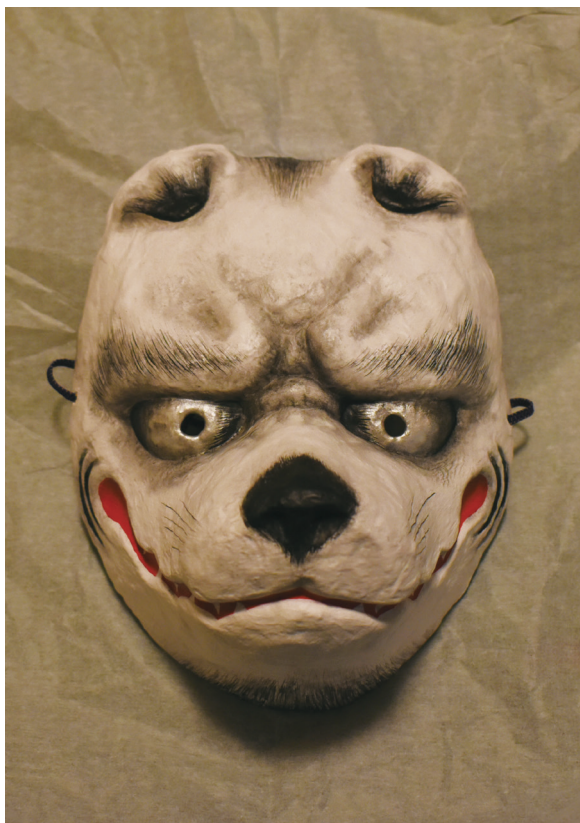
大庭 なるほど。面作りは初めての方々でしょうから、作業にも苦心されましたね？

宮松 はい。私が粘土で作った面の型を型取りしたプラスティックの土台を、ボランティアの人数分用意して効率化をはかりました。作業が難しいことに加えて制作期間が短かったので、和紙張りの工程を簡略化し、八女和紙の使用は表面一層にとどめました。着色もできるだけ単純にして、最後に私が手直しをして。「切腹ピストルズ」がお祭り当日につけたお面の着色は、私みずから行いました。



ボランティアの人々と一緒に作った狼面

る。ここには四十代前半ぐらいの温厚な方で、令和五年より筑後の地で創作活動をはじめたということだけを記しておく。早速、筑後で八女和紙を使った作品を創り続ける作家のお話に耳を傾けよう。（大庭）



「切腹ピストルズ」用の狼面（宮松喜久三郎作）

に東京にて結成。紆余曲折をへて、野良着や印裃纏に菅笠姿の二十数名の隊員で、和太鼓、尺八、三味線、鉦などで演奏する現在の形態に定まる）のメンバーの一人でもあり、うきは市に住んでいるんですが、数年前から、彼がこのお祭りの実行委員長を務めてまして、お祭りで「切腹ピストルズ」のライブをやったんです。「切腹ピストルズ」は、これまでも「名物みやげ」と銘打つ品々を作っていますが、以前から貞方君と新たなものを作れないかと話してまして。「お祭り横丁」を機に、お面を作ってはどうかということになったんです。

大庭 「切腹ピストルズ」と狼は、どんなご縁が？

宮松 日本は明治期に急速に近代化、西洋化を進めました。「切腹ピストルズ」は、近代化の中で日本が失ったものの、忘れ去られようとしているものに目を向けようとしています。ニホンオオカミは明治時代の終わりに絶滅したとされ、近代化のなかで失われたものの一つです。だから彼らはニホンオオカミをグループの象徴的な動物と考えて、ライブの時に彼ら自身が着る羽織や、「名物みやげ」として販売されている肌着や鯉口シャツ、レコードジャケットト等にも、ニホンオオカミの図案を使用しています。狼を祀る東京都青梅市

大庭 ははあ。お祭りで売り出した面と、「切腹ピストルズ」の特別仕様の面とでは、印象が全然違いますね。

宮松 ボランティアの方々でも出来るように、売り出したものは、細部の彩色工程は省いています。

大庭 ボランティアの人々とは何個ほど作ったのですか。

宮松 五十に満たないほどですかね。購入希望が多く、急遽、抽選で買っていただきました。



うきは市の「お祭り横丁」（令和5・7・23）のチラシ

大庭 でしょうね。これは皆さん、欲しがるでしょうね。私がまず感動したのは、狼の古風な顔立ちです。現代人がこういう面を作ると、妙に民芸風にしたり、古様のなかに現代的な要素を無理に加えたりして、嫌味になりがちですが、この狼面は違う。古いものを随分研究されたでしょう？神楽のお面とか、神社仏閣の彫刻とか。

宮松 ええ。狼をモチーフにした古い置き物やお面は少ないので、狐などの獣を作ったものも参考にして。先ほどの御嶽神社のように、全国には狼の像を祀る神社が沢山あります。それらを集成した本もとても参考になりました。大庭 それから、この古風な面が八女和紙で作られているというのにも、私はすっかり感動したんです。八女和紙は今、後継者の不足や需要の減少で存続が危ぶまれてますから。

宮松 そうですね。私は朝倉出身で、父の生まれが八女なので、前々から八女和紙をはじめ、筑後の伝統工芸や地場産業には興味がありました。また、私の学生時代からの友人で大石明香さんという方がいて、彼女のご実家が松尾和紙工房（八女市柳瀬）でした。数年前、そこへ伺いまして、和紙で何か作れるのではないかと始めたんです。今でも張子のお面や人形をつくる際には、

お母様の松尾さんに相談に乗っていただき、心強い限りです。
大庭 へえ、松尾和紙工房の娘さんとお知り合いに。「切腹ピストルズ」は今でもこのお面を付けているのですか。

宮松 ええ。「狼神楽」という楽曲を演奏する際に使っていたいいます。先月末に行われたパリ・ファッションウィーク（通称パリコレ）で、日本のKIDILというブランドがメンズコレクションを発表したそうですが、その際に「切腹ピストルズ」がこのお面を付けて演奏したそうです。

大庭 なるほど。八女和紙で作った狼面が海を渡って、パリで披露されたのですね。（次号へ続く）

◀宮松喜久三郎氏のインスタグラムはこちら



松尾和紙工房
福岡県八女市柳瀬六八一・二〇九四三・二四・三八七六



久留米大学文化財保存科学研究部会

〒839-8502 福岡県久留米市御井町1635

<http://kurumebunkazai.jp/>

令和7年3月20日発行

印刷：城島印刷株式会社

〒810-0012 福岡市中央区白金2丁目9番6号

伝統工芸の国・筑後 第六号

〈対談〉八女和紙を使う

——張子面、張子人形、団扇、錦絵——（一）